

一夜城の如く

木村佳司

2012年12月2日に神奈川県で開催されるはずだった東日本オリエンテーリング大会が中止になった。

脅迫状がJOAに届く

2012年11月21日に日本オリエンテーリング協会のwebサイトに以下の発表が掲載された。(以下原文掲載)

東日本大会中止についてのお知らせ

2012年11月21日

来る12月2日に当協会が後援、神奈川県オリエンテーリング協会が主催する東日本大会に関して、11月7日、11月12日、11月15日、11月19日の4回に渡って当協会の事務局に、脅迫状が送付されました。15日、20日のものについては同内容のものが会場施設宛にも届きました。内容は、東日本大会の中止を求めるもので、もし要求に応じない場合は、参加者に被害が及ぶ旨の記述がありました。

一通目の脅迫状の到着後から、当協会は所轄の渋谷警察署に相談すると同時に、所属する(公財)日本体育協会とも連絡をとりながら、状況の確認と対応策の検討を行ってきました。その結果、脅迫者からの要求が次第に具体化したことや、脅迫状が会場に近い小田原市内から送付されるようになったこと、広い山林を競技フィールドとする個人アウトドアスポーツの特性として、参加者の安全確保が万全とは言えないこと、開催地元にもトラブルが及ぶ可能性があることを鑑み、警察および日本体育協会とも相談をし、12月2日の南足柄での競技会は実施できないとの判断に至りました。

本件は匿名の脅迫状によって、アウトドアスポーツに対して卑劣な妨害を行うものとして、社会的にも到底許容することのできないものです。当協会としては今後被害届を所轄警察署に提出すると同時に、警察と協力して真相究明を行うとともに、関係スポーツ団体とも協力しながら、このような行為が二度と起こらない方策について検討していく所存であります。

同時に、当協会および傘下のオリエンテーリング団体では、国民の健康作りや生きる力の育成に資するスポーツとして各地で大会を開催する際、私有地の利用について、地元の方々へ周知

の上理解を得る点でも最大限の努力を努めてきました。また自然保護関係からの要望についても真摯に対応して参りました。今後とも、地域社会の中でご理解とご協力をいただけるよう、ますます努力する次第です。

(以上原文掲載)

苦渋の決断

この大会は日本学生オリエンテーリング選手権(インカレロング)も併設していた。日本学連のインカレロング担当理事として、脅迫状の第一報を聞いたときは半信半疑だった。オリエンテーリング競技に関わって30年以上になるが、いまだこのような事件に出くわしたことはなかったからである。

この対応を巡って、日本協会、神奈川県協会、日本学連の関係者で早くから協議を行うとともに、警察と連携・相談した。その結果、神奈川県で開催する予定だったプログラムのすべてを中止することに決定した。ここまで重ねてきた準備を思うとあまりにも残念な決断だった。

困難を乗り越えて

神奈川県での開催中止を受け、普通なら併設されていた競技会も中止になるところだ。

だがインカレだけは場所を変更しても開催したい・・・この思いは関係者の中に強くあった。神奈川中止の決断と同時に別トレインでのインカレ開催が検討された。関係者が強い思いを抱いたのはおそらくこんな理由だと思う。

インカレを学生に提供したい

このインカレを目指して全国から数百人の学生たちがやってくる。この日を目指して練習しクラブ活動をしている。インカレは日本のオリエンテーリングの明日を創るイベントだと言える。インカレを実施することはオリエンテーリングの明日を開くことなのだ。

脅迫に負けない

卑劣な行為に対して何とか対抗し、アウトドアスポーツの悪しき前例となりたくない。

さまざまな困難を乗り越え目的を達してゆく・・・これはオリエンテーリングという競技が持つ特徴だ。

東日本大会中止決定を受け、急遽再

編されたインカレロング実行委員会は、数々の困難をナビゲーションですり抜けながら12月2日の開催を目指した。これに向け調整されたスケジュール、資材やさまざまなリソースの活用を考えた。

全国からは12月2日に向けて調整された学生数百人たちが集まってくる。この情熱を生かす場を作りたい。

そのために、開催地を神奈川県と隣接する静岡県東部に求め、わずか10日の間に会場、トレイン、コース、選手村にも大変更が行われた。この困難なミッションを支えたのは多くの人の厚意である。

- ・会場となった富士山こどもの国
- ・地図提供してくれた静岡県協会
- ・相談に乗ってくれた静岡県社会教育の行政機関、警察機関
- ・選手村となった静岡県内の公共宿泊
- ・大量バス輸送を手配してくれた日本旅行と伊豆箱根バス
- ・なによりも運営に参じてくれた多くの人たち

防犯体制

場所を変更しての開催といえども、大会が終わるまでは防犯体制をとり続けた。警備を行いやすくするため、開催地と日時は参加者に個別に伝え、一般公開は行わなかった。インカレロングが無事終了するまで、情報の取扱いを慎重に行うように参加者にはお願いした。学連は大学ごとに代表者が明確で、指示伝達系統がしっかりしていることが幸いした。

参加者側も一致協力し、1000人近いイベントにも関わらず、防犯体制を最後まで崩すことなくインカレ無事終了まで導くことができた。

防犯体制はコースや各種基準の逸脱にも影響を与えたが、こうしたプレを容認することは前日の日本学連総会で承認され、全員がインカレ成功に向かって邁進する体制を取った。

豊臣秀吉による小田原攻め一夜城のように、わずか10日間で作り上げたインカレロング大会。参加者を含めたすべての人たちの団結力と、その瞬発力は今後の財産となるだろう。

(木村佳司)